

「パワハラ指導の禁止を」 看護学校の当事者らが首相に要望書

保坂知晃 2024年1月24日 10時00分

コメントプラス

白川優子さんのコメント



看護学校で教員らからパワハラを伴う指導を受けたと訴えている当事者や保護者らが23日、看護学校でのパワハラ禁止を求める要望書と約3万3千筆のオンライン署名を岸田文雄首相ら宛てに提出した。

要望書を提出したのは、看護学校の指導の実態調査や学生からの相談を受け付けている団体「全国看護学生はぐくみネット」（高橋裕樹代表）など。東京の参院議員会館で、文部科学省と厚生労働省の担当者に要望書を手渡しした。

団体が実施したアンケートでは「大量の課題により睡眠不足のまま実習に参加し救急車で運ばれた」「精神疾患となり学校に行くことも働くこともできなくなった」などの看護学生の声が寄せられたという。

こうした声を受けて要望書では、ハラスメント予防に関する研修の受講を看護学校の関係者に義務づけることや、問題があった場合に設置される第三者委員会の人選について被害者側の意見も考慮することなどの8項目を求めている。

高橋さんは2022年に岐阜県内の看護専門学校で実習中だった息子を自死で亡くした。第三者委の調査は学校の対応は不適切だったとする一方で、ハラスメントは認めなかった。高橋さんは「行政の歩みは遅いが、少しずつ改善しようとしていると思うので待つしかない」と話した。（保坂知晃）

コメントプラス

いま注目のコメントを見る >



白川優子 (国境なき医師団看護師) 2024年1月28日22時51分 投稿

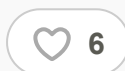
【視点】 そう思うと、私が看護学生だった1990年代はパワハラまみれだったことになりませんが、何が問題だったかというと、誰もがそれをパワハラだとは認識していなかったことです。看護学生は、特に実習が始まると、予習や課題（ひたすら大量の看護記録）で寝られない日々がやってきます。それに対しては弱音を吐いてはいけないうし、脱落は恥、そんな世界でした。当時、実習の期間中に倒れてしまったクラスメイトもいたので

すが、良くあることとばかりに騒がれることはありませんでした。世の看護師の先輩たちはみなそうやって同じ道を辿ってきたのだから、自分たちも同じように頑張らなくてはいけないのだ、と必死でくらいついたものです。まだ看護師のことを看護婦と呼んでいた時代です。

この記事を見、このような実情に対して「辛いことは我慢して当たり前」から「辛いことをおかしいと思って良い」という時代になっているのだなと思いました。

苦労話は勲章になりがちです。パワハラ連鎖を断ち切るためにも、「私もそうだったのよ、だからあなたもそれくらいは頑張りなさい」ではなく、「我慢しなくていいんだよ」と、言える先輩、指導者となれるように意識していこう、と改めて自分に言い聞かせる良い機会になりました。

NEW



コメントへの感想をお寄せください



朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.